

中古和文における動作動詞と心理表現

——「うち」を構成要素とする複合動詞——

岩瀬 莉奈

1 はじめに

中古和文の複合動詞研究は、古くは文法論の中の単語の構造からはじまり、古代語複合動詞における文学的意味研究や、心情との関連性を見出す研究に繋がってきた。心情表現の研究として、竹内美智子（1986）「源氏物語の複合動詞」は、「源氏物語の豊富な語彙のほとんどが、複合語や接尾辞の添加による派生語などの、複雑な構成の語で占められている」ことや、「源氏物語の語彙を品詞別に分類してみると、動詞・形容詞・形容動詞などの、文の述語となる性質をもつ語彙が、七千余種あり、全語彙の約五〇%を占めている」ことに注目し、源氏物語の「思ひ」を前項にとる複合動詞は、「閉ざされた心の世界を描くためのものが極めて多い」と述べている。この論は、複合動詞と心情との結びつきを考える上で重要な論考である。しかし、直接的な心情語としての複合動詞の研究は「思ふ」等の心情動詞が中心で、動作動詞の研究は十分になされていない。

そこで本稿では、動作動詞が複合することによって生じる心理表現を中心に取り上げ、中古和文における複合動詞の表現効果や、心理表現を解明する一階梯としたい。このような研究は、近年現代語を対象としたものでいくつか見られ、「心理的複合動作動詞」⁽¹⁾と呼ばれている。

複合動詞の表現効果を明らかにするため、その後項動詞の単独動詞と意味用法を比較する。その際、中古文学作品で複合動詞が心理表現として機能する例を体系的に示すため、各動詞の表現効果に対し名称を付加し位置づけた。

2 先行研究と本稿の対象語

はじめに、「うち」⁽²⁾という語基を持つ複合動詞についての従来説を整理する。「うち」の意味を見出すものとしては、以下の研究があげられる。堀勝博（1986）「『うちわたす』の考察」では、

「打渡」「打越」「打行」「打集」「打上」「打廻(うちみる)」「打出」において、「打

につづく後項動詞は、全て野外における行動にかかわっている。その行動には「馬」が不可欠であったと思われるから、これらの「打」を羈行に関する語ととることはきわめて自然である。逆に、「打」を接頭語とすることは、よみうる意味を残らず捨象してしまうことになり、慎重を期すべきであろう。

と述べている。また一方、近藤明（1997）「中古における『うち+他動詞』の意味」では、「うち—」の意味・用法について、

「意志性・意図性の弱さ」（「ウチオク・ウチカク・ウチスツ・ウチヤル」）「対象への働きかけの弱さ」（「ウチオク・ウチカク・ウチスツ・ウチヤル・ウチマズ」）「対象の受ける影響・変化の弱さ」（「ウチオク・ウチカク・ウチスツ・ウチヤル・ウチマズ」）

を指摘している。このように、「うち—」には複合による具体的意味が見出されており、単なる「語調を整える接頭語」⁽³⁾と捉えるべきではない。特に心理表現に関わるものとしては、以下の先行研究があげられる。阪倉篤義（1983）「接頭語『うち』の消長」は、

『竹取』『伊勢』あるいは『土左』のような初期の物語日記の文章が、次第に淀みを含んだ、陰影を帯びたものになり出したとき、それを助けるのに大いに力のあったのが、この「うち」という接頭語による造語であった。

と述べている。「陰影」と表される物語の奥行きをつくる表現には、心理表現との関わりを見出すことができよう。さらに、近藤明（1996）「『ウチワラフ』の意味の時代的变化」は、

文脈から判断される笑いの原因・性質であるが、「ウチワラフ」では、別の感情（どちらかというとなイナスの）を含みながらの、苦笑い・皮肉・当惑の笑いの類が目立つ。

と指摘しており、「うち—」と複合することによる「笑う」心情の限定化が見られ、研究方法について、①「動詞の分類の必要性」⁽⁴⁾と、②「意味の時代的变化への考慮の必要性」⁽⁵⁾を指摘している。さらには、上記近藤（1997）では、同じ出家の場面でも、「スツ」単独では「女三の宮が自らの意志をもって薫を捨てる、という意識が多分に加わって」おり、源氏の女三宮への非難が表出する（柏木巻）が、「ウチスツ」の場合は「心ならずも捨てる」、主体の心苦しさが表出する（若菜上巻）と述べられている。このように動作動詞の複合による心理表現の表出は一部明らかになってはきているが、検討された語は限られている。

以上のように、「うち—」を構成要素とする複合動詞の表現性を探る研究は長年なされているが、網羅的に動詞を確認できていない点、意義研究が中心で心理表現の研究が

十分になされていない点に、更なる研究の余地を見出せる。

中古和文における「うちー」を構成要素とする複合動詞は、異なり語数で610例と数多くあり⁽⁶⁾、特に中古和文の用例が多いことから研究の有効性を見出せる。本稿の目的は、中古における「うちー」を構成要素とする複合動詞の特徴・役割を説明する一説となることと、「心理的複合動作動詞」を考える上での一階梯となることである。

以下、中古における「うちー」動詞のうち、動作を表す自動詞との複合に着目し、中古にまとまった用例が確認できる「うちうなづく」「うちそばむ」「うちそむく」「うちうめく」の4つの複合動詞を取り上げたい。それぞれの具体的動作の用法を検討すると共に、心理的表現効果について比較検討する。

3 「うちうなづく」

まず、「うちー」の複合語「うちうなづく」の用いられる文脈について検討する。「うちうなづく」は中古に9例⁽⁷⁾あり、一般的に「首を前にひょいと動かして理解または承諾、同意、肯定の意を示す。」(『日本国語大辞典』)の意で用いられる。一方で単独の「うなづく」は「了解、肯定、承諾、勧誘などの気持を表わすために首を縦に振る。首を前へ曲げて合図する。」(『日本国語大辞典』)のように用いられることから、2語の差は明確になされていないようである。以下、「うちうなづく」と「うなづく」の用例を比較検討する。

3.1 「うちうなづく」—複雑・受諾

中古の「うちうなづく」の用例は以下の通りである⁽⁸⁾。例文中の()は内容理解のために筆者が補ったものである。

- (1) (若紫は) 幼心地に、(源氏を) めでたき人かなと見たまひて、「宮の御ありさまよりもまさりたまへるかな」などのたまふ。(女房は)「さらば、かの人の御子になりておはしませよ」と聞こゆれば、うちうなづきて、いとうありなむと思したり。(『源氏物語』若紫)
- (2) (紫の上は、匂宮への遺言として二条院を譲り)「大人になりたまひなば、ここに住みたまひて、この対の前なる紅梅と桜とは、花のをりをりに心とどめてもて遊びたまへ。さるべからむをりは、仏にも奉りたまへ」と聞こえたまへば、(匂宮は) うちうなづきて、御顔をまもりて、涙の落つかめれば立ちておはしぬ。(『源氏物語』御法)

- (3) (中宮は、実子である若君に対し母親を知るものという立場で語りかけ)
「(略)ただ御心ひとつに、さる人(母上)は世にあるものと思して、さるべ
からん折はこのわたりに常にものしたまへ。忍びて見せきえん」と語りひ
たまへば、(若君は)いとあはれと思ひたる気色にてうちうなづきて居たる
が、いみじうつくしう、離れがたき心地させたまへ

〔『とりかへばや物語』巻4〕

(1) は、源氏の美しさに感動し期待を抱きながら頷く、幼い若紫の動作である。(2) の匂宮の「うちうなづく」動作は、幼いながらに紫の上との死別を感じとり、悲しい心情を抱えて控えめに頷く動作である。(3) は、母子の逢瀬の場面で、中宮からの言葉を受け胸をうたれて頷く動作である。若君は、この前の場面で、「もしこれ(中君)やそれ(母君)にものしたまふらん」と心中で推測しており、複雑な心情を抱えた動作と考えられる。このように、中古和文における「うちうなづく」は、幼い子供の行動を描くものが比較的多く、複雑な状況下で幼いながらも考えを巡らせ控えめに頷く動作として用いられている。一方で、大人が「うちうなづく」例としては以下があげられる。

- (4) (衛門督の妻である大式女は中納言から和歌を詠まれるが) えならずなまめ
かしくめでたきを、女も限りなき見知られて、

さらでだに花たちはなは身にしむにいか忍びの音さへ泣かれむ
と言ふけはひも、いとをかしうなつかしきに、まことに見捨てがたければ、
「いざ、やがて率て隠してむ。いかにおほすべき」とのたまへば、(女は)ほ
のかにうちうなづきて、今すこしなびき寄りたる、いとらうたく心苦し

〔『浜松中納言物語』巻3〕

- (5) (妍子は病気のため信長の世話ができず、可哀そうに思っ) 御乳母、殿に、
「このごろばかりは迎へたてまつらせたまへ。御物の怪の散りたるも恐ろし」
と聞えさせられたれば、げに、さもと、思して、七月十余日に二条に迎へたてま
つりたまふ。「おこたらせたまへば、(二条邸に) 参らせん」と申させたまへ
ば、御前(妍子) うちうなづかせたまふ。 (『栄花物語』巻29)

(4) は、大式の娘が中納言からの問いに対し、夫がいるという複雑な事情を抱えながらも控えめに頷き受容する動作である。(5) は、自身の病気のため子と離れ離れになることを承諾する、切ない動作を描いたものである。したがって、大人の「うちうなづく」においても、控えめに頷く際の、主体の複雑な心境が浮き彫りとなる。複雑な状況を受諾するために、声には出さず動作で対話し、控えめに「うちうなづく」動作は、主体の心理が色濃く表現されたものであって、それは阪倉(1983)の「淀み」や「陰影」と表

現される効果と大きく関連するのではないだろうか。言葉には出さず、相手としぐさで対話するかのように用いられることから、「うちうなづく」は対話表現としての動作であると考えられる。本稿では、「うちうなづく」動作を〈複雑・受諾〉と示すことにする。

さらには、(3) では若君が「うちうなづく」後に母の目線で「いみじうつくしう、離れがたき心地」と評価が述べられ、(4) では大武女が「うちうなづく」後に中納言による「いとらうたく心苦し」という評価が述べられている。両者共に「愛らしい」という感情の評価が共通しており、弱々しく「うちうなづく」ことは他者にプラスの印象を与える対話表現としての動作であったと考えられる。

3.2 「うなづく」—単純・同意

一方で、中古和文における単独の「うなづく」には以下のような用例がある。

- (6) 多くは、わが心も見人からをさまりもすべし。あまりむげにうちゆるべ見
放ちたるも、心やすくらうたきやうなれど、おのづから軽き方にぞおほえは
べるかし。繫がぬ舟の泛きたる例もげにあやなし。さははべらぬか」と言へ
ば、中將うなづく。(『源氏物語』帚木)
- (7) 御気色の例ならずおはしませば、「やや、参りはべり」と申させたまへば、
御髪削ぐまねをせさせたまへば、「尼にならせたまはんとや」と申させたま
へば、うなづかせたまふを、泣く泣くなしたてまつらせたまふ。

(『栄花物語』巻29)

(6) は、妻に対する男性の立場での議論で、左馬頭からの問いかけに対し同意の姿勢を示す中將の動作として用いられている。(7) は、道長が妍子に出家の意志を尋ね、妍子が意志を表す動作である。同じく『栄花物語』中の妍子の動作としての用例である(5)と比較すると、「うなづく」は自身の考えを表明する〈単純な同意〉の動作であり、「うちうなづく」は自身の置かれた状況から複雑な思いを抱えて頷く〈複雑・受諾〉の動作であるという違いが明確になる。したがって、「うちうなづく」は動作的には控えめに頷くぐらいの意であるが、単に「うなづく」より、主体の複雑な心境を示すのである。

4 「うちそばむ」

次に、「うちそばむ」の文脈について検討する。「うちそばむ」は中古に11例あり、

「はにかんで顔をそむける。わきを向く。」(『日本国語大辞典』)の意、単独の「そばむ」は一般的に「横を向く。わきを向く。」「かたわらに寄る。恥じらいや、遠慮がちなようにいう。」「顔をそむけてうらみなげく。」(『日本国語大辞典』)の意とされる。単独「そばむ」には情動的な語釈がなされているが、「うちそばむ」では「はにかむ」という要素のみで、検討の余地を見出せる。本節では、この両者の用例を比較検討し、特に「うちそばむ」際の心情に注目する。

4.1 「うちそばむ」—瞬間・羞恥

中古の「うちそばむ」について、状況や心情と、その評価に注目する。

- (8) 帥の君、三尺の几帳引き添へていざり出でたり。よき童への、袴いと艶やかにて、灯よきほどに取りなさせて、御台参らせたまふ。大将は、恥づかしと思ふらむとて、うちそばみて居たまへり。 (『宇津保物語』楼の上 下)
- (9) (若紫が文はまだ良く書けないと言うので、源氏は) うちほほ笑みて、「よからねど、むげに書かぬこそわるけれ。教へきこえむかし」とのたまへば、(若紫の) うちそばみて書いたまふ手つき、筆とりたまへるさまの幼げなるも、らうたうのみおほゆれば、心ながらあやしと思す。「書きそこなひつ」と恥ぢて隠したまふを、せめて見たまへ (『源氏物語』若紫)
- (10) 姫君、いとうつくしうひきつくろひておはす。「久しかりつるほどに、いとこよなうこそおとなびたまひにけれ」とて、小さき御几帳ひき上げて見たてまつりたまへば、うち側みて恥ぢらひたまへる御さま飽かぬところなし。 (『源氏物語』葵)
- (11) 昼はさりとて、とうち解け給へるに、(中納言が中に入ってきたので) 姫君言はむかたなうあさましうおほされて、まぎらはさむかたもなければ、ただうちそばみてる給へる (『浜松中納言物語』巻2)
- (12) 内侍の督の君、限りと思し夕べ、いみじくうち泣きてまほにはあらずうちそばみたまへりし御顔におほえたるかなと、(大将は) ふと思ひ出づれど、うつたへにその御有様変はりぬらんと思ひ寄らず (『とりかへばや物語』巻3)
- (8) は、帥の君が恥づかしく思うだろうと配慮しさりげなく横を向く、仲忠の心遣いが現れる動作、(9) は、まだ十分に書けない文を源氏の前で書くことになり、源氏の視線を避けるためさりげなく横向きになって隠すように書く動作であり、恥じる心情が表出している。(10) は、源氏が几帳を引き上げたため、さりげなく視線をそらし目を合わせぬよう恥ぢらう紫の上の動作であり、(11) は、昼間から侵入する中納言に対し心

外に思いながら、隠れるものがないので横を向くという動作である。(12)は、尚侍が大将の前で涙を隠す動作である。このように中古の「うちそばむ」は、11例中9例が男女間で使用され、目の前の相手を見ないように配慮したり、見られないよう努めたりする対話的な動作であって、これは他者を意識した恥じらいの心情を含んだ行動といえる。

さらに、(9)の源氏は、若紫の「うちそばむ」動作を「らうたし」と評価し、(10)の源氏は、紫の上を「飽かぬところなし」と評価しており、「うちそばむ」動作はしぐさで対話し相手を魅了するという側面も持つと考えられる。

4.2 「そばむ」—継続・横見

一方で、「うちそばむ」の特徴として見られた、男女間での使用の場に限定した中古和文における単独の「そばむ」には、以下のような用例がある。

(13) 君なるべし。白き衣の萎えたと見ゆる、着て、搔練のはり綿なるべし。腰より下にひきかけて、側みてあれば、顔は見えず。 (『落窪物語』巻1)

(14) (中納言は)女君にさし寄りて、「しばしと思ひたまへし山里に見まほしき文などはべりけるを、え見さしはべらざりつるほどを、おぼつかなしと尋ねさせたまふやとこころみはべりつるに、過ぎはべる折々もかひなく、思ひわびて、人わろくこそたち帰りはべりぬれ」と聞こえたまふに、御答へせん方なくて、いとどしくそばみて顔をもてまぎらはして答へたまはざめれ

(『とりかへばや物語』巻1)

(13)は、姫君が横を向いた状態である様子である。(14)は、中納言の恨み言に対し顔を背けた状態であることで答えないことを示す動作である。前に述べた「うちそばむ」の例と比較し、一見他者から顔を隠すための動作として似通っているように見えるが、両者には僅かに違いがあるように思われる。「そばむ」女君は元々顔を背けているものや、対面している途中から他者の問いかけなどをきっかけとして横を向く、動作主体の継続的な状態を表すものがほとんどである。それに対し「うちそばむ」女君には、他者の突然の侵入や視線から何かを隠そうと横を向く「瞬間性」⁹⁾が現れている。よって本稿では、「うちそばむ」を〈瞬間・羞恥〉、「そばむ」を〈継続・横見〉の動作と位置づける。

5 「うちそむく」

続いて、「うちそむく」の文脈について検討する。「うちそむく」は中古に13例あり、

中でも「背を向ける。そっぽを向いている。遠ざかり離れる。」(『日本国語大辞典』)と
いった動作の意で用いられるものは11例ある。単独の「そむく」は一般的に「後ろ向
きになる。背中を向ける。反対方向やわきを向く。」(『日本国語大辞典』)の意とされる。
両者の心理の差は語釈に明確になされていない。本節では、中古和文における「うちそ
むく」と「そむく」の用例を比較検討し、特に「うちそむく」際の心情に注目する。

5.1 「うちそむく」—交渉遮断・外的要因

以下の中古の5例について、状況や動作と、その評価に注目し取り上げる。

- (15) (男というものは、分からずやの妻相手では) あやなきおほやけ腹立たしく、
心ひとつに思ひあまることなど多かるを、何にかは聞かせむと思へば、うち
背かれて人知れぬ思ひ出で笑ひもせられ、「あはれ」ともうち独りごたる
(『源氏物語』帚木)
- (16) (朝顔の姫君の元へ行こうと挨拶に来た源氏は、紫の上の横顔が尋常ではな
いことを察して)「あやしく御気色の変れるべきころかな。罪もなしや。塩
焼き衣のあまり目馴れ、見だてなく思さるるにやとて途絶えおくを、またい
かが」など聞こえたまへば、(紫の上は)「馴れゆくこそげにうきこと多かり
けれ」とばかりにて、うち背きて臥したまへるは、見棄てて出でたまふ道も
のうけれど、宮に御消息聞こえたまひてければ、出でたまひぬ。
(『源氏物語』朝顔)
- (17) (匂宮は薫との仲を疑い、中の君に詰め寄って言うので) 聞きにくかたは
らいたしと思して、「大輔などが若くてのころ、友だちにてありける人は。
ことにいまめかしうも見えざめるを、ゆゑゆゑしげにものたまひなすかな。
人の聞き咎めつべきことをのみ、常にとりないたまふこそ。なき名は立てで」
とうち背きたまふも、らうたげにをかし。(『源氏物語』東屋)
- (18) (寝覚の上は、母として石山の姫君への恋しさに耐えられず自身の部屋に)
入れたてまつらであべきならねば入れたてまつりたまふに、殿つづきておは
いたるに、「日ごろいとあやしくのみ心みたるさまを、いまさらに。あいな
のわざや」と思ふに、姫君の御めづらしさも覚めて、奥ざまにうち背きて臥
いたまひたる
(『夜の寝覚』巻5)
- (19) (内大臣が、翌日寝覚の上の元へ行くために女一の宮に挨拶をして)「おろ
かにのみははべらぬ心を、大皇の宮のことわり過ぎたる勘当こそあまりには
べれ。かばかりのもてなしは、罪あべいことにもはべらぬものを」ときこえ

たまふに、(並大抵の女であれば) なほさべき御答へはあるべきを、(女一の宮は) ただうち背きておはします。「宮たちは、ただかうぞ、事もなく、あてにおはしますべきぞかし」と、本意ある心地するものから、あまりさうごうしきも、ものをおほし知らせたまはぬにはあらず、あくまで心深く、気高きの過ぎさせたまひて、何事も世づいて答へむは、うたておほしめすべし。

(『夜の寝覚』巻5)

(15) は、男が分かってくれない妻に対しそっぽを向く動作、(16) は、機嫌を取りに来た源氏を恨めしく思う紫の上が、そっぽを向く動作、(17) は、薫との関係を疑われたくない中の君が、人聞きの悪いことを言うなど言い返しそっぽを向く動作、(18) は、寝覚の上が、日頃から内大臣を避けてきたにも関わらず自室に入ってこられたため、困って背を向ける動作、(19) は、内大臣が他の女の元へ行く挨拶に来たのを、女一の宮は静かに背を向けたままの状態を迎える様を示す。

さらに、「うちそむく」動作は、(16) では「見棄てて出でたまふ道ものうけれ」と男の罪悪感を掻き立て、(17) では「らうたげにおかし」と語り手の視線で評される。そして、(19) では「あてなり」と男の立場から評される。しかしここで注目したいのは、(19) の評価で、気品が高い動作としながらも、一方で「さうごうし」と、物足りない行動として語られる点である。この点に「うちそむく」行為の心理が表出しているのではないだろうか。中古の「うちそむく」は、11例中10例⁽¹⁰⁾が相手に対する恨みを抱えた動作でありながら、直接的に相手に抵抗するものではない。むしろ対話するようにしぐさで相手との交渉を絶ち、自分の中に閉じこもる行為といえる。よって、「うちそむく」は〈交渉遮断・外的要因〉の動作と位置付ける。

また、(15) の「うちそむく」について「つい…する、の意の接頭語」(『新全集』注釈) と述べられているように、「うちそむく」は、目の前の相手の言動を契機として恨みを持ってそっぽを向く動作であり、前節で指摘した「瞬間性」を含む語であると考えられる。

5.2 「そむく」—秘匿・内的要因

中古の「そむく」には、「世に背く」といった出家する意としての用法が多くみられるが、「うちそむく」に多く見られた背を向ける動作としての用法に限定すると、以下の用例があげられる。

- (20) (藤壺は出家について東宮に語りかけ)「さはあらで、髪はそれよりも短くて、黒き衣などを着て、夜居の僧のやうになりはべらむとすれば、見たてまつら

むこともいとど久しかるべきぞ」とて泣きたまへば、(東宮は)まめだちて、
「久しうおはせぬは恋しきものを」とて、涙の落つれば、恥づかしと思して、
さすがに背きたまへる (『源氏物語』賢木)

- (21) 宮も起きみたまひて、御髪^の末のところせう広ごりたるを、いと苦しと思して、
額など撫でつけておはするに、(源氏が)几帳を引きやりてゐたまへば、
(女三宮は)いと恥づかしうて背きたまへる (『源氏物語』柏木)

(20) は、母宮の真剣さに、出家の意味を知らずとも会えなくなる悲しみを幼いながらに感じとった東宮が涙を隠す動作である。(21) は、不義故の出家であり、自身の尼姿を源氏に見られるのがきまりが悪い心地がして、背を向ける様子を示す。このように、中古の背を向ける動作としての「そむく」は、涙や尼姿など、自身に要因のある見られたくないものを相手に隠すしぐさとして用いられており、(秘匿・内的要因)と位置づける。

6 「うちうめく」

最後に「うちうめく」の文脈について検討する。「うちうめく」は中古に9例あり、「ため息をつく。嘆息してちょっとことばを出す。」「苦心して歌う。苦心して詩歌を作る。」(『日本国語大辞典』)といった語釈がなされている。一方で単独の「うめく」は、一般的に「嘆息の声をあげる。ためいきをつく」「苦心して詩歌を作り出す。苦吟する。」(『日本国語大辞典』)とあり、語釈に用法差は認められない。本節では「うちうめく」「うめく」の用法を比較検討し、それぞれの意味と心理を考察する。

6.1 「うちうめく」—特定・落胆

中古の「うちうめく」の用例を取り上げ、状況や心情に注目する。

- (22) (末摘花から元日の装束が無神経に贈られてきたのを見て源氏は)人のほどの心苦しきに、名の朽ちなむはさすがなり。人々参れば、「とり隠さむや。かかるわざは人のするものにやあらむ」とうちうめきたまふ。(命婦は)何に御覽ぜさせつらむ、我さへ心なきやうにと、いと恥づかしくてやをらおりぬ。
(『源氏物語』末摘花)

- (23) (柏木は小侍従に)げに、(女二宮を女三宮と)同じ御筋とは尋ねきこえしかど、それはそれとこそおぼゆるわざなりけれ」とうちうめきたまへば
(『源氏物語』若菜下)

- (24) 女君、もの隔てたるやうなれど、いととく見つけたまうて、這ひ寄りて、御背後より(文)取りたまうつ。(夕霧は)「あさましう。こはいかにしたまふぞ。あな、けしからず。六条の東の上の御文なり。今朝風邪おこりてなやましげにしたまへるを、院の御前にはべりて出でつるほど、またも参でずなりぬれば、いとほしさに、今の問いかにと聞こえたりつるなり。見たまへよ、懸想びたる文のさまか。さてもなほなほしの御さまや。年月にそへいたう悔りたまふこそうれたけれ。思はむところをむげに恥ぢたまはぬよ」とうちうめきて、惜しみ顔にもひこじろひたまはねば、さすがにふとも見で、持たまへり
- (25) (大納言は、中の君に対する弁の乳母の当てつけを黙認する大君に対し、やめさせるよう言うが、大君は)「見聞くことなれば、言ふにこそあらめ。聞きにくかるべきことならば、(中の君に)おほし寄るまじくこそあらましか」と答へたまへるに、(大納言は)心づきなければ、うちうめきて、起き出でたまひぬ。
- (26) (四の君の)父大臣は、おどろおどろしげなる誓言をたてて、そのままに見たまはず。幼くより母北の方は大臣の御思ひの限りなきに思しゆづりて、いとすぐれてはなき御思ひにはありけん、「思はずに心づきなかりける御有様かな」とうちうめきて、身にかへても添ひるたまはず。

(『とりかへばや物語』巻3)

(22) は、末摘花から時代遅れの古物の装束が贈られてきたのを見た源氏が、呆れ果て溜息をつく動作である。こうした源氏の末摘花への「うちうめく」は他にも2例あり、源氏の落胆が表されている。(23) は、女三宮のことを諦めきれない柏木が、女二宮を頂戴したが実際には姉妹とも思われず似ていないと吐息を漏らす動作である。(24) は、雲居雁に取られた御息所からの手紙を、六条の上からのものだと言い、手紙を取るなどはしたくないことをするなど心外に耐えられぬように嘆いて見せる夕霧の動作である。(25) は、大君に妬心やまない返事をされたために、大納言が不愉快に思い溜息をつく動作である。(26) は、右大臣の四の君への勘当がひどい仕打ちであると、北の方が溜息をつく動作を示す。このように中古の「うちうめく」は、特定の相手の言動に対する落胆や呆れ、悲しみの心情を抱えた動作であり、「うちうめく」ことで対話する〈特定・落胆〉の動作といえる。なお、「うちうめく」ことに対する外部からの評価は確認できなかった。

6.2 「うめく」—不特定・慨嘆

中古の「うめく」の用例をあげる。

- (27) (結婚前に仲人が、女の)「後れたる方をば言ひ隠し、さてありぬべき方をばつくるひてまねび出だすに、それしかあらじと、そらにいかがは推しはかり思ひくたさむ。まことかとも見てもゆくに、見劣りせぬやうはなくなむあるべき」と(中将は) うめきたる気色も恥づかしげなれば、(源氏は)いとなべてはあらねど、我も思しあはすることやあらむ、うちほほ笑みて

(『源氏物語』帚木)

- (28) この人々のなかに、知らであるべきにあらず。さりげなう思ひかまへて、御供には具せずなりにけるなんめりとおぼすに、泣きまちへるさまもいみじきを、げには、みなは知るべきにもあらず。一二人は知らぬやうにはあらじとおぼえて、「さりとも、おはしどころなく、空には消えうせ給ふべきやうなし。御ゆくへ知る人あらむ」とて、とばかりうめきて (『浜松中納言物語』巻5)

(27) は、結婚前に仲人が女について吹聴することに対し慨嘆する動作を示す。(28) は、姫君失踪について女房たちの中に知るものがあるだろうと中納言がうなるようにつぶやく様子である。このように、中古の「うめく」は、「うちうめく」のように嘆く原因として特定の相手がいるわけではなく、複数人であったり分かっていなかったりして、自身の状況そのものについての嘆きの動作と考えられる。よって、本稿では〈不特定・慨嘆〉の動作とする。

7 まとめと今後の課題

本稿では、中古における「うち」を構成要素とする4つの複合動詞について、単独の動作動詞の用法と比較、検討した。

「うちうなづく」は、主体が複雑な状況下で考えを巡らせ控えめに頷く〈複雑・受諾〉の動作であり、単独「うなづく」は自身の考えを表明する〈単純・同意〉であった。

「うちそばむ」は、目の前の相手を見ないよう配慮したり、見られないよう努めたりする〈瞬間・羞恥〉としてはたらき、「そばむ」は元々顔を背けているものや、対面している途中から他者の問いかけなどをきっかけとして横を向く〈継続・横見〉の動作であった。

「うちそむく」は、相手に対する恨みを抱えながらも相手との交渉を絶つ〈交渉遮断・外的要因〉の動作であり、「そむく」は自己に要因のあるものを隠す〈秘匿・内的要因〉

の動作であった。

「うちうめく」は、特定の相手の言動への落胆や呆れ等の心情を抱える〈特定・落胆〉であり、「うめく」は、嘆く要因が一人に定まらない、自身の状況を嘆く〈不特定・慨嘆〉と位置づけた。

このことから、中古における動詞の複合化に、2つの現象を見出せる。まず、複合化によって、心理的側面が強くなるという点だ。本稿で取り上げた4つの複合動詞は「心理的複合動作動詞」としての用法を確認でき、「うちー」の持つ「控えめに」「つい」といった意が、物語の文脈において主体の単なる意思表示から複雑な心境を包含するものへ変化すると考えられる。もう一つは、目の前の相手への行動として用いられる点である。調査対象とした4語全てが目の中の相手や特定の相手への行為として用いられており、「うちー」について従来指摘のある「瞬間性」との関わりを見出せる。このように、「うちー」を構成要素とする複合動詞には、心理的表現と対話的表現が付加されていると考えられる。

そして、「うちうなづく」「うちそばむ」「うちそむく」ことにより、ほとんどがその動作を見せた相手から「らうたし」や「あてなり」等、プラスの評価をなされている。これは、相手に好印象を与える動作として機能しているということであり、上に述べた2点目の対話的表現と関わることである。

本稿で取り上げた「うちー」動詞は4語にすぎない。さらに体系的な調査を行い、「うちー」を構成要素とする複合動詞の特徴を解明することを今後の課題とする。

(2021年度博士前期課程修了)

【註】

- (1) 関口美緒 (2020) 「前項動詞『焼く』と共起する動作動詞が心理的動作を表す複合動詞」では、前項後項共に動作動詞であっても心理を表す語を「心理的複合動作動詞」と位置づけ、現代語の複合動詞「焼き～」の意味用法を検討している。現代語の複合動詞研究においては宋殷美 (2004) 「感情の複合動詞としての『待ち+V2』」においても心理状態との関連性について述べられている。
- (2) 山王丸 (2011) による、名詞「内」に由来するものとする説もあるが、多くは「〔接頭〕多く実質的な意味をあらわす動詞に付く」(日本国語大辞典)のように接頭語とされており、動詞「打つ」に由来する接頭辞「ウチ」と考えられている。
- (3) 『日本国語大辞典』では、「うち」の語釈について、「下の動詞の意味を強めたり、

単に語調をととのえたりする。おだやかな動作を表わす語に付いて、『すこし』『ちょっと』の意味を加える場合もある。』と述べている。

- (4) 「『激しさ・強度』が問題になり得るような動詞であるか否か、あるいは主体・対象に変化をもたらすような意味の動詞であるか否かによって『ウチ動詞』の意味のあり方に差がある」と、動詞の種類を統一的に捉える方法に疑問を示し、後接する動詞を分類する方法をとっている。
- (5) 「ウチワラフ」を例にあげ、中古と中世とで意味が大きく変化していることから、時代を限定して研究する必要性を指摘している。
- (6) 『平安時代複合動詞索引』による。
- (7) 本稿で調査した文学作品は、『古今和歌集』、『竹取物語』、『伊勢物語』、『大和物語』、『平中物語』、『土佐日記』、『蜻蛉日記』、『宇津保物語』、『落窪物語』、『堤中納言物語』、『枕草子』、『源氏物語』、『和泉式部日記』、『紫式部日記』、『更科日記』、『讃岐典侍日記』、『浜松中納言物語』、『夜の寝覚』、『狭衣物語』、『栄花物語』、『大鏡』、『とりかへばや物語』である。
- (8) 引用本文は、『新全集』による。以下、注釈本は論文末の「参考テキスト」に記載した略称を用いる。
- (9) 大野晋 (1974) では、「うちー」の接頭語について、「動詞の上につくと、その動詞に瞬間的だという意味が加わる。『風うち吹き』『雨うち降り』といえ、風がさっと吹き、雨がさっと降ることである。」と、「うちー」の瞬間性について言及している。
- (10) 例外扱いした1例は、突然局に薫が入ってきたことで、女房の一人が困り恥じて、背を向き誰か分からぬよう隠れる動作（蜻蛉巻）であり、“恨み”の要素は薄い（交渉遮断・外的要因）とは言える。

【参考文献】

- ・岩瀬莉奈 (2021) 「中古和文における複合動詞の心理描写 — 『ふす』『すべる』『みざる』 —」『フェリス女学院大学日文学部紀要』 25
- ・大野晋 (1974) 『日本語をさかのぼる』 岩波新書 (p.50 ~ 51)
- ・近藤明 (1996) 「『ウチワラフ』の意味の時代的变化 — 『ウチ動詞』の意味変化の一例 —」『国語語彙史の研究』 16、和泉書院
- ・近藤明 (1997) 「中古における『ウチ+他動詞』の意味」『日本語の歴史地理構造』 加藤正信編、明治書院

- 阪倉篤義 (1983) 「接頭語『うち』の消長」『国語語彙史の研究』4、和泉書院
- 山玉丸有紀 (2011) 「『接頭語』と解される『うち』について—源氏物語における『うち』を中心として—」『汲古』60、汲古書院
- 関口美緒 (2020) 「前項動詞『焼く』と共起する動作動詞が心理的動作を表す複合動詞」『言語と交流』23、言語と交流研究会
- 宋殷美 (2004) 「感情の複合動詞としての『待ち+V2』」『言語科学論集』8、東北大学大学院
- 竹内美智子 (1986) 「源氏物語の複合動詞」『平安時代和文の研究』明治書院 (初出: 「造語法の問題 (〈おもひ〉型動詞)」『国文学』1977年1月号、学燈社)
- 林田孝和他編 (2002) 『源氏物語事典』大和書房
- 東辻保和他編 (2003) 『平安時代複合動詞索引』清文堂出版
- 堀勝博 (1986) 「『うちわたす』の考察」『ことばとことのは』3、和泉書院

【参考テキスト】

- 阿部秋生他校注 (1998) 『源氏物語』新編日本古典文学全集、小学館 = 「新全集」
- 阿部秋生他編 (1987) 『源氏物語』日本古典文学全集、小学館
- 石田穰二・清水好子 (1977) 『源氏物語』新潮日本古典集成、新潮社
- 田中新一他編 (1988) 『新釈とりかへばや』、風間書房
- 玉上琢彌 (1967) 『源氏物語評釈』第八卷、角川書店
- 柳井滋他校注 (1993) 『源氏物語』新日本古典文学大系、岩波書店
- 柳井滋他編 (1999) 『源氏物語索引』新日本古典文学大系、岩波書店